

英語スピーチコンテスト参加を通じた英語の発音指導

桑 本 裕 二

A Case Study of Teaching English pronunciation targeting Kōsen English Speech Contest

Yuji KUWAMOTO

(平成21年11月25日受理)

This is a case study of teaching English pronunciation targeting Kōsen English Speech Contest. The preliminary contest in Tohoku region was held on November 21, 2009 at Sendai National College of Technology (Natori Campus), and I was in charge of teaching a participant in this event how to speak English fluently or how to appeal to audience more efficiently. Of course, writing skill and the construction of speech as a whole are very important for an efficient speech, but, above all, I concentrated on English pronunciation in the speech. I made my trainee student practice English pronunciation along with its intonation, rhythm or other phonetic or phonological items. By doing so the trainee student got a certain level of speaking skill of English, though he couldn't win a prize of the contest. Through this experience we can hope to apply this speech training to education in our Kōsen.

1. はじめに

高専の英語教育に求められる目標として、「実用的コミュニケーション能力」の養成などということが、ほとんど何の反省や具体的な改善がなされることなく無責任に唱えられている。しかしながら、このような目標や指標が明示的に掲げられ、英語科目担当の教員としてこのような目標・指標を達成しなければならぬという責務を負っている現状のなかで、「実用的」とはどういうことか、「コミュニケーション」とは具体的に何を以てどのようにすることなのか、に関して、しっかりと把握した上で教育に当たらなければならないと思っている。

「実用的」、「コミュニケーション」ということばによってまず第一に想起されることは、音声を介するものであろう。これは、特別何の道具も使わないで、相対している人に対して、咄嗟に意志の伝達を行う手段が、発話・聞き取りという音声を媒介とするものだからである。また、このようないわゆる「会話」は、見た目にも非常に目立つものであることから、「英語ができる」ということが「会話ができる」と等価であるというように短絡されてしまう。

ところで、この「会話」、こと英語を介するとな

ると「英会話」と言われ、この名を冠する授業科目名が大学等を含めても存在するし、習い事や一般社会人向け講座、教室などもあり、履歴書の趣味の項目に並べられたりなど、現状ではある一定のステータスを持ったものとみなされている。しかし、所詮「会話」は「おしゃべり」である。ある程度のスピードで会話をやりとりするのはそれなりの訓練と技術を要するだろうが、「おしゃべり」が巧みになったとしても、高専で求められる「実用的なコミュニケーション能力」の達成とはほど遠い。

この一方で、書く、読むというコミュニケーションも存在する。これは、言語学的に言えば、音声コミュニケーションに対しては二次的、副次的なものともみなされる。しかし、論理的なこみ入った内容を正しく理解し、それを他者に伝えるために我々は文章を記し、さらにそれを読むことによってその内容を正確に理解するのであり、内容が学術的、専門的であれば、なおのことそれが必要となるのであるから、この「書く・読む」というコミュニケーションこそが高専で求められる主要な能力といえるのではなかろうか。

さらに、「書かれた原稿を音読する」という行為を考えてみたい。「書かれている」ということでは十

分に論理的で内容が濃いものであることが期待できる。そして、それを「音読」することは、音声を紹介するコミュニケーションであり、書かれた言語のコミュニケーションと違って速効性が生じることになる。また、効果的でかつ説得力のある発話を行うためには、漫然とした雑談のような会話とは違う、抑揚、声の大きさ、ポーズの置き方など、さまざまな発話の有効性を考慮する必要が生じる。これは、簡単な会話を含めての音声コミュニケーションを有効に行うための、正確な発音やその他の音声的な情報のことである。

高専の学生は、将来、大学、大学院へと進学し研究を続ける場合、国際的な学会で口頭発表を行うような際に、論理的にまとまりのある内容の（書かれた）原稿を「音読」する機会が発生する。あるいは卒業後、一般企業へ就職した場合は、様々な場面で企画、開発にあたり、やはり専門的な内容に関してプレゼンテーションを行うこともあり、この場合、「書かれた」原稿を「音読」することになる。時には、英語を使用する場合もあるだろう。高専の学生の様々な将来に期待される活動を鑑み、それへの礎としての英語教育を考えた場合、英語で論理だった論文（エッセイ）が書ける、さらにそれをある程度の効果を持たせて発話（スピーチ）できる、ということこそが、いわゆる「実用的な」コミュニケーション能力であるといえ、英語で書かれた原稿を音読する、またはプレゼンテーション形式でそれを実践する、ということは、音声、書写双方のコミュニケーション能力を総合的に高めることができるという点では、きわめて有益な活動であると結論づけられる。

そういう現状の中で、2007年度より全国高等専門学校英語プレゼンテーションコンテストが開催されることになった（主催：高等専門学校連合会、全国高等専門学校英語教育学会（COCET））。秋田高専では、第1回から東北地区予選に学生が参加しているものの、2008年度の第2回大会までは組織的な指導を行う体制がなかった。2009年度からは、ロボットコンテスト、プログラミングコンテスト、デザインコンペティションなど、高専独自の競技大会に対応するものとしての同等の組織と位置づけられ、校長が正式に任命する指導教員において、組織的に指導体制を整えて取り組むこととなった。筆者はこのような体制下での英語プレゼンテーションコンテストの初めての指導教員となったが、本稿は、2009年度の第3回全国大会をにらむ、2009年11月開催の東北地区大会へ向けての、参加学生の英語スピーチの指導に関する実践報告である。特に工夫した点は、

学生の学年次の英語運用能力に相応した指導のあり方、また、現行の英語のカリキュラム上からはおろそかにされがちな発話指導の重要性と、指導実践における強調、DVD教材、ICレコーダの効果的な利用実践などである。

2. 秋田高専における英語の発話教育の現状

現在のところ、秋田高専の英語のカリキュラムの上で、発話教育が充実しているとは言い難い。もちろん、様々な能力の養成が期待されるなかで、そのうちのどの項目に重点をおくのかという場合に、音声教育が最もないがしろにされがちな項目なのかもしれない。一般に、語学の理解には、「読む」「聞く」「書く」「話す」の4技能の相互的な養成が必要だと言われるが、そのうち、受動的である「読む」「聞く」能力に最も重点がおかれている。これには、TOEICや英検などの外部評価的指標においても、通常の授業の評価の対象となる定期試験においても、評価しやすいという事情もある。これに次いで、やはり論文指導なども見込んだ「書く」能力、つまり英作文、英語エッセイの指導であり、これはカリキュラム上にはなかなか設定できないにしても、例えば専攻科の学生に対しては十分に必要とされることである。これらの技能に対しては、「話す」（または音読する）能力にはなかなか重点をおきにくいという現状である。

秋田高専において主に発話教育を実践していると思われる授業科目は、「英語LL演習」と「英語会話」であろう。

「英語LL演習」は、LL教室を使った聞き取り、発話を見込んだ演習形式の授業で、通年週2時間（現行では100分）の授業のうち、2006年度開講分までは初期3ヶ月（通常前期中間試験頃まで）、2007、2008年度は前期中に、発音記号を重点的に教授するものであった。残りの開講分では主に聞き取りを中心にしたLL教材を使っていたので、「英語LL演習」においては、この発音記号の教授にあてた部分が発話教育であったといえる。2008年度までは1年次対象の授業として開講された。2009年度入学者からは後述の事情によって3年次開講授業となったため、実質的に2009年度（および2010年度）は本授業は開講されていない。

「英語会話」は外国人教師担当の会話を基調とした授業で、ネイティブスピーカーである外国人教師の発音を実際に聞く、または聞き取って理解するという貴重な時間であるとともに、自ら発話する、し

かも発音が正確でなければ伝わりにくいという現場の緊張感のなかで、自分の言いたいことを伝えるという貴重な体験を授業で与えるものと位置づけられる。2009年度までは（カリキュラム上は2008年度以前入学者までが対象）、2年次対象、通年週2時間の授業である。2009年度入学者からは3学次に移行するので、2010年度は「英語LL演習」同様、実質的には開講されない。

これら2つの発話養成を目指す授業科目を低学年から3年次へ移行したのには、文法教育を低学年次において充実させようというねらいと連携させるという理由による。「英語LL演習」および「英語会話」の開講学年変更を含む、2008年度以前入学者向け、2009年度以降入学者向けの、3年次までの英語関連授業開講状況を次に表示する。

表1 3年次までの英語カリキュラム（2008年度以前入学者）

	総合英語	音声教授科目	文法	単位数計
1年次	英語I (4)	英語LL演習 (2)		6
2年次	英語II (4)	英語会話 (2)		6
3年次	英語 III (4)			4

() は単位数

表2 3年次までの英語カリキュラム（2009年度以降入学者）

	総合英語	音声教授科目	文法	単位数計
1年次	英語I (4)		英文法I (2)	6
2年次	英語II (4)		英文法II (2)	6
3年次	英語 III (2)	英語LL演習 (1) 英語会話 (1)		4

() は単位数

2008年度以前入学者までを対象としたカリキュラムの下での主な問題点は、全学年を通して、文法の理解がおろそかだということがあった。これは、TOEIC IPテスト、英検の本校学生の得点分布からも明らかであったが¹、やはり、低学年次での文法教育の強化がなんと言っても重要であるとの理念から、1、2年次での英語関連科目各6単位中、2単位分を独立した文法の科目に充てることとした（表2）。これに伴って1年次開講「英語LL演習」（通年週2時間、2単位）を3年次（半期週2時間、1単位）へ、2年次開講「英語会話」（通年週2時間、2単位）を同じく3年次（半期週2時間、1単位）へ移

¹ TOEIC IPテストと英検についての、秋田高専学生の読解力や作文力（つまり構文把握力）に関しては桑本（2006）でデータとともに実力養成の必要性を述べている。また、桑本・菅原（2007）は、主に高学年における長文読解力の養成の必要性を論じている。

行、同学年開講の総合英語の科目「英語III」を4単位（通年週4時間）から2単位（通年週2時間）へ変更し、全体として各学年次開講単位数を変えることなく1、2年次で文法、読解中心の教育、3年次で外国人教師の発音を聞きながら発音記号を覚え、音声について実践とともに深める音声中心の教育というふうな、学年を追って主要な実践内容が明確に分かれるようにし、改善をはかった。実際の運用は2010年、2011年度を待たねばならず、現段階ではいまだ希望的観測の域を出ないが、当面の課題であるTOEICテストの得点をさらに向上させるため、また、英検、特に2級の取得者をさらに増やしていくためにも、この改革はかなりの効果が期待できると思われる。

しかしながら、2009年度の時点では上記表1のカリキュラムに基づいた音声教育しか実践されておらず、この現状のもとでスピーチコンテストへ参加する学生を指導することに関しては、授業実践をほとんど踏まえることができなかった。次節では、2009年度に行ってきた英語スピーチコンテスト参加学生に対する主に英語の発話指導の実践を報告する。

3. 英語スピーチコンテストへの取り組み

3.0.

第1節で述べたとおり、「英語スピーチコンテスト」に対する秋田高専での取り組みは、2009年度にようやく本格的になったばかりである。本節では、初めての専属担当指導教員となった筆者が、当年度当初から試行錯誤を繰り返しながら参加学生とともに歩んできた実践について紹介する。また、本稿提出時で全国大会の予選会となる東北地区大会（2009年11月21日実施）終了直後であるが、本時点における参加学生の英語発話能力の向上や、今後へ向けての反省点などを述べる。

3.1. 参加学生の選出

ロボコン、プロコン、デザコンなどと同様の組織であるという建前と、高専の学生会組織の傘下にあるクラブと同じく学生の課外活動との位置づけから、年度当初の、新入生対象クラブ紹介で、宣伝をし、その後希望参加者を待ったが、5月はじめに1名の希望者をみた。とりあえず活動初年度は、この1名の学生に対して指導を行い、コンテスト出場を目指すことにした²。

² 希望者のいない場合は、筆者が能動的に働きかけて適任者を選出しようと考えていた。

3.2. 実践

3.2.0.

コンテスト参加学生は、物質工学科第2学年の男子学生で、指導するのが1名であること、所属学年が第2学年であることなどを考慮しながら、活動のメニューを考えることにした。第2節で言及したとおり、現時点で英語科目のカリキュラム上は音声指導の教育が十分になされていないこと、また、対象学生が第2学年と英語学習の経験が未熟であることなどを考慮し、発音、発声の指導、訓練を活動当初の中心においた。活動は基本的には週2回、2時間程度とした。表3は、東北地区大会終了時までの活動記録である。

表3 2009年度スピーチコンテスト活動記録

回数	日付	内容	
1	6/4	テキストの音読	DVD視聴(発音教材)
2	6/8	〃	〃
3	6/11	〃	〃
4	6/15	〃	〃
5	6/18	〃	〃
6	6/22	〃	〃
7	6/25	〃	〃
8	6/29	〃	〃
9	7/2	〃	〃
10	7/6	〃	〃
11	7/9	〃	〃
12	7/13	〃	〃
13	7/16	〃	DVD視聴(邦画 英字幕付)
14	7/23	〃	〃
15	8/6	〃	〃
16	8/10	〃	〃
17	9/2	〃	〃
18	9/9	〃	〃
19	9/16	テキストの音読	DVD視聴(洋画 英字幕 有/無)
20	9/30	〃	〃
21	10/1	テキストの音読	〃
22	10/5	スピーチ原稿の作成	〃
23	10/15	原稿修正	DVD視聴(洋画 英字幕 有/無)
24	10/19	〃	〃
25	10/22	〃	〃
26	10/26	スピーチのリハーサル	〃
27	11/4	〃	〃
28	11/5	〃	〃
29	11/9	〃	〃
30	11/12	〃	〃
31	11/13	〃	〃
32	11/17	〃	〃

33	11/18	〃	〃
34	11/19	〃	〃
35	11/20	〃	〃
	11/21	東北地区大会当日	

主な活動内容は、以下の通りとなる。

1. テキストの音読練習
2. DVD視聴(発音教材)
3. DVD視聴(映画)
4. スピーチ原稿作成、修正
5. スピーチのリハーサル

以下で、それぞれの活動内容について、特に強調した点、工夫した点などについて述べる。

3.2.1. テキストの音読練習

活動の当初に最も強調して取り組んだのは、流暢な発話の習得である。論理的にまとまりのある、書かれた文章で、しかも学生に馴染みのあるものとして、学生の学年次(2年次)での総合英語「英語II」で使用している教科書(CROWN English Series II New Edition, 三省堂, 2008)から、既習の単元のテキストをとりあげ、それを音読する訓練を行った。この訓練を、活動第1日目(6月4日)から、夏期休業直前の活動第16日目(8月10日)まで継続的に行った。はじめは分節音レベルの正確な発音を、そして次の段階には文アクセントやイントネーション、パラグラフごとのまとまりに注意を向け、数回ごとに文章全体を通読するというものである。文ごとに筆者が模範を示して繰り返させる、教科書付属CDのサンプルの朗読を模範にする、またはシャドウイング³などを行い、毎回最低1回はICレコーダに録音し、再生して聞かせることで問題点を検討し、また、回を追うごとの進歩を確認した。問題のある発音やイントネーションは、その都度筆者が矯正し、どうしてもできない場合は何度も繰り返し行うなど、経験的に音声を習得できるよう工夫した。特に困難であった点は、およそ次の通りである。

分節音レベルの発音の理解

- ・ /l/ と /r/ のそれぞれの発音と区別。
- ・ /θ/, /ð/ の発音。

³ ネイティブスピーカーの読んだ(CDなどに吹き込まれた音声なども含む)文章をほぼ同時に音読する、音声教育の一手法。リズム、イントネーションの理解や、ポーズの置き方などを体得するのに効果があるとされる。

- ・ /æ/, /ʌ/, /ə/ のそれぞれの発音と区別。
- ・ "magic" の /dʒi/ と "music" の /zi/ の区別。

音節構造の理解

- ・ 閉音節の発音。たとえば "children" の d と r の間に /o/ のような音を入れてしまう。
- ・ その他の子音連続の発音。たとえば "street" の語頭の 3 子音連続の発音など。

アクセントの理解

- ・ 単語レベル、文レベル双方のアクセントの位置の把握。
- ・ "refugée" のような最終音節にアクセントがある特殊なアクセント構造の語の把握

3.2.2. 発音教材のDVD視聴

発音に関しては、理論に基づいて着実に理解する必要を感じ、発音記号の理解を養成することとした。2009年1月から3月までにNHK教育テレビで放映された「3ヶ月トピック英会話 話して聞き取る！ネイティブ発音塾」(2009年1月6日～3月24日、火曜日23:00-23:20放送、全12回、番組のテキストは斎藤(2009a-c))をDVDに録画し、それを活動第1日目から12日目まで、1回の活動に、番組1回ずつ視聴させ、番組内でネイティブスピーカーの講師が模範を示している箇所などを反復練習した。

斎藤(2009a-c)の全12回の放送内容は以下の通りである。

- Lesson 1. /l/ vs. /r/
- Lesson 2. /s/ vs. /ʃ/
- Lesson 3. /ə:/ vs. /ɑ:/
- Lesson 4. /ɔ/ vs. /ʌ/
- Lesson 5. /æ/ vs. /ɛ/
- Lesson 6. /ʊ/ vs. /u:/, /ɪ/ vs. /i:/
- Lesson 7. /s/ vs. /θ/
- Lesson 8. /p/ vs. /b/, /t/ vs. /d/
- Lesson 9. /ɛ/ vs. /eɪ/
- Lesson 10. /ɔ:/ vs. /oʊ/ (/əʊ/)
- Lesson 11. /ɪə/ vs. /i:l/
- Lesson 12. conTENT vs. CONtent

Lesson 1, 4, 7 などの内容は、3.2.1. で指摘した難しい聞き分け、言い分けに関するトピックである。番組の各回は、東京大学教授の斎藤兆史氏が講師を務め、音声学の知識に基づき、音声実験装置の使用や、ネイティブスピーカーの講師の実際の発話など

も盛り込みながら行われる講座であり、専門的な知識にも触れながら、英語学習初心者向けにうまく構成されており、学生の発音指導には実に最適であった⁴。

3.2.3. 映画の視聴

上記3.2.2.のテレビ講座の視聴を終えると、まもなく夏期休業に入る時期でもあり、また、やがてスピーチ原稿を作成しなければならないという理由から、様々な英語表現を映画鑑賞によって確認しようと考え、映画の視聴によってそれを実行した。

まず行ったのは、日本映画の鑑賞(視聴)である。2時間程度の映画を30分ごとに区切り、同じ場面を2度繰り返し視聴した。次の通りである。

- 1回目 字幕無し
- 2回目 英語字幕付き

これは、英語の音声に慣れるよりむしろ、日本語で、馴染みのある状況の下での馴染みのある表現が英語でどう表現されるかを学習するためであり、スピーチの英語表現に生かすという意図があった。これを4回繰り返すことで1本の映画を鑑賞し終えることになった。

次に、洋画(原語は英語のもの)の鑑賞をとおして、独特の英語表現や、英語音声、間合いの入れ方、感情表現の抑揚などを確認した。こちらの視聴は、日本映画の場合と若干異なる。

- 1回目 日本語字幕付き
- 2回目 英語字幕付き

または、

- 5分ごと：
 1. 日本語音声吹き替え、字幕無し
 2. 原語(英語)音声、英語字幕の繰り返し

という方法で視聴した。

夏期休業中は、週1回のペースだったことや、時

⁴ Yuzawa (2009) は斎藤(2009a-c)に対し、大筋は利点や初学者に対する効果を認めながらも音声学的には問題であるとされる点を8項目にわたって言及している。しかしながら、Yuzawa (2009) の指摘は高度に専門的な音声学的論点であって、本テレビ番組講座の初学者に対する目的や効果に影響するものではないとしておく。

間的に余裕があったことなどで、夏期休業をはさむ時期（7月16日～10月15日）は、ほぼこの活動で終了した。

3.2.4. スピーチ原稿の作成

9月下旬頃に英語スピーチコンテストの東北予選についての通知があり、過去2回はビデオによる審査で全国大会への代表を選出していたものを、本年初めての試みとしてコンテスト大会を実施する旨伝えられた。実施日は2009年11月21日であり、10月の後期授業開始頃より本格的にスピーチコンテストの準備を行ったが、まずはじめに、スピーチ原稿の作成を行った。

参加学生は第2学年であり、自分の主張を自由に表現するほどに英語の運用能力は備わっていないと考えられたので、参加学生に対してまず日本語でスピーチ原稿を書いてもらい、筆者がそれを適切に英訳するという方法をとった。

10月5日の活動から添削指導などを行ったが、はじめに日本語の原稿の文章構成や、全体的な長さ（スピーチ時間は7分以内とされていた）を修正し、それを筆者が英語に翻訳した。筆者の翻訳には当然意訳も含まれていて参加学生の主張が適切に表現しきれない箇所があることが予想されたので（さらに参加学生の英語読解力にも問題があったので）、筆者の英訳をさらに日本語に訳したものを準備し、その英語原稿の内容に関してチェックをし、参加学生にも修正させた。また、音読練習の際などに発音しづらい単語は、参加学生にとっては難解なものと判断されたので、平易な単語を使った表現に修正し、その他、語調や勢いなどによって微修正をしていった。全体的なテキストの長さはA4判ダブルスペース2枚程度（約650語）となった。

3.2.5. スピーチのリハーサル

スピーチ原稿の音読、つまり、コンテスト本番のリハーサルは、10月26日の活動から行ったが、これは、本番の約4週間前に当たる。

以下、本番直前4週間のスピーチのリハーサルの概要は以下ようになる。

①第1週～第2週（第26回（10/26）～第28回（11/5））

- ・原稿の通読、所要時間のチェック。初回は途中でつかえたりしながらも、計時したところ、6分39秒で、スピーチの長さは十分といえた。スピーチの時間は、慣れてくるにしたがって流暢になった

が、結局6分前後というところに落ち着いた。

- ・第26回は、分節音の発音チェック中心、第27～28回は、主に、文全体、段落ごとのまとまりを中心にリズムやポーズの置き方を指導。

②第3週（第29回（11/9）～第31回（11/13））

この週には計3回の活動を行ったが、主に聴衆を意識したものとした。

第29回（11/9）

- ・外国人留学生による視聴と内容チェック
カメルーン出身の留学生（英語母語話者ではないが、幼少期より日常語として英語を使用）に協力してもらい、スピーチのリハーサルを視聴、表現上、あるいは音声上聞き取りにくい、理解しにくい点などを指摘してもらい、その他のコメントを求めた。特に、有益な意見として、段落ごとのまとまりを大事にするべきとの指摘を受けた。

第30回（11/12）

- ・クラス担任による視聴
コンテスト当日の緊張感に慣れるためと、クラス担任に対するスピーチの紹介という意図もあり、参加学生の所属クラス担任に立ち会ってもらい、スピーチを視聴、忌憚のない意見、感想を求めた⁵。上記、留学生の意見とも関連するが、スピーチ全体の抑揚、めりはりがなさすぎてアピール性に欠けるとの意見を受けた。スピーチ全体の構成として、最も強調したい部分はどこなのか、それを際立たせるために他の部分との声の大きさの違い、読む速さの違いなどを意識した音読が求められることをとった。

第31回（11/13）

- ・講義室でのクラスメート参加のリハーサル
やはりコンテスト本番の雰囲気慣れる目的で、場所を講義室に移し、教壇を演壇に見立ててリハーサルを行った。その際、有志のクラスメート3名にスピーチを聞いてもらった。これは、この週のコンセプトにもなった、聴衆を意識した活動の一環でもあるが、今度は、普段の同等の仲間が聴衆であることの安堵感のなかで参加学生にスピーチの音読を体験してもらうことと、英語学習

⁵ 2Cクラス担任の上林一彦先生は、高校時代にESSクラブに所属し、地域の英語スピーチコンテストに参加した経験があるとのこと、実際の経験からも貴重な意見を伺うことができた。

途上で、英語の聞き取りが十分とは言えない2年次学生の聴衆に、どこまで英語のスピーチを理解させられるのかを試す機会ともなった。

この週の活動を通して、英語のテキストを音読するスピーチにおいて重要なことは、声の大小、読み上げる速度などによってスピーチ全体にメリハリをつけることであり、そうすることで視聴者に対して伝えたい内容を強く訴えかけることにつながるということである。第4週における最終調整への課題となった。

③第4週（第32回（11/17～第35回（11/20））

最終週はテクノコミュニティ（大型の講演等向けホール）で、本番を前提としたリハーサルを行った。この週のリハーサルで特に重点をおいたのは以下の項目である。

- ・スピーチの補助としての身振り手振り
- ・スピーチ全体に抑揚やメリハリをつける
- ・細かい単語レベルの発音
- ・文単位、段落単位のイントネーションや、ポーズの置き方
- ・並列関係にある句、数値が出てくる句などを強調する

大会直前までに特によく身についたと思われる点は以下の通りである。

- ・ /l/ と /r/ の区別。特に /r/ 音ははっきりと発音できるようになった。
- ・ "be good at," "in addition to" などのリエゾン
- ・ "year" /jɪə/, "future" /fju:tʃə/ などの r 化音 (rhotacism) の発音
- ・ /ə/ (schwa) の発音

一方、どうしても習得できなかった点は以下の通りだった。

- ・スピーチ全体に緩急、抑揚をつけて話すこと
→強調する点を際立たせるために、そうでないところの読みが甘くなる、という欠点を克服できなかった。
- ・ /f/ の発音
- ・ /si/ vs. /ji/ の区別
- ・子音連続の発音

最終回（11月20日実施）には、留学生2名と、英語教員1名にリハーサルを視聴してもらい、最終段階のスピーチに対してコメントをもらった。

3.3. 東北地区大会の概要と結果

東北地区高等専門学校英語スピーチコンテストは、全国英語スピーチコンテストへの地区代表者を選出するものであり、前述の通り、全国大会3回目にしてはじめて東北地区コンテスト大会が実施されることになった。2009年度の大会の概要は以下の通りである。

日時：2009年11月21日（土）13:00より

会場：仙台高等専門学校名取キャンパス

スピーチの規定：スピーチの部は一人あたりの制限時間は5分以上7分以内、発表テーマは自由。発表に際して機器等の使用は認めない。

審査方法：参加校の引率・指導教員による審査（自校参加者の審査は除く）。

全国大会と同じ採点方法（English/Content/Delivery の3項目による審査）

秋田高専からの出場者：

物質工学科第2学年 菅原 拓郎 君

スピーチのタイトル：

My Severe but Challenging *Kōsen* Life

（厳しくもやりがいのある私の「高専」ライフ）

スピーチの順番：

出場者は東北地区の全7高専より9名。開始前の抽選により、本校の出場者菅原拓郎君は9番目のスピーチ。

結果：出場9名中、第6位（得点は383点/600点）

※第1位は445点、入賞3位以内は432点。

本校の出場学生は、結果的に入賞を果たすことができなかった。ジャッジングシート（審査表）によると、審査基準となった3項目の本校出場学生の得点率は、English: 6.3（平均 6.52）、Content: 6.3（同 6.72）、Delivery: 6.5（同 6.39）であったが、この結果からすると、英語そのものの運用（音声面）、およびスピーチの内容に平均値からの未熟さが見てとられ、今後へ向けての課題となった。

4. おわりに

以上、筆者の英語スピーチコンテスト担当初年度としての、東北地区予選会の参加までの指導の取り組みについて報告し、その際に工夫した点、特に指導上強調した点などを述べた。使用言語は日本語であれ英語などの外国語であれ、スピーチをする際にもっとも重要なことは、聞き手に主張を積極的に理解してもらうことである。これは、大まかに言えば2点に集約できると考える。1点は、内容の話題性や構成力、つまり原稿の文章構成力である。もう1点は流暢な発音、声の大きさ、ポーズの置き方なども含めた発話に関することである。英語の基礎的な運用力の学習途上にある高専学生に対してスピーチの指導をするにあたり、なにが最も重要であるかを考えた場合、まずは音声指導であると判断した。これは、第2節で論じたとおり、英語のカリキュラム上、音声教育が不十分であるという事情とも関連している。また、今回は指導対象学生が第2学年と低学年次であり、原稿の英作文に関しては筆者が全面的に補助するという措置をとらざるをえなかったが、指導対象学生が高学年の場合には、前者の文章構成力の指導なども含めて指導する必要があると思われる。

今回、他高専の学生の英語力に触れるという貴重な機会を得たが、それぞれの高専における英語指導のあり方をかいま見たような気がし、翻って本校における英語教育にも今回の経験を還元していかなければならないと痛感した次第である。

また、今般、本校では「英語スピーチコンテスト」の指導体制がロボコン、プロコン、デザコン等と同等に、学校の組織化に位置づけられ、活動自体が効率よく、また指導体制も充実した状態で取り組むことができたが、他高専の現状では、まだまだ、英語教員が「片手間」に押しつけられた業務(?)という域を脱していないようである。本校におけるスピーチコンテストへの取り組みが、他高専においても外国語科目担当業務の地位向上につながることを願う。

謝辞

東北地区スピーチコンテスト出場準備にあたり、以下の方々の協力をいただいた。物質工学科第2学年担任 上林一彦先生、人文科学系英語 黒木暁人先生、物質工学科 丸山耕一先生(専門用語の確認)、電気情報工学科第4学年学生 ティアコ・ジュイモ・ウォルター君(カメルーン出身、英語の話者として)、同ファリド・ビン・バジュリ君(マレーシア出身、ただし非英語話者)、物質工学科第2学年学生大澤未来さん、佐藤勇太君、千田梓さん(出場者のクラスメートとして)。

参考文献

- 桑本裕二「高学年・専攻科における英作文指導の必要性和そのあり方—秋田高専における現状をふまえて—」『秋田工業高等専門学校研究紀要』第41号, 56-62, (2006)
- 桑本裕二・菅原隆行「5年次学生に対する長文読解およびオーラルレポートの実践—英語の実用的読解力および表現力養成をねらって—」『秋田工業高等専門学校研究紀要』第42号, 58-65, (2007)
- 斎藤兆史編『NHKテレビ 3ヶ月トピック英会話 (1月～3月期) 話して聞き取る! ネイティブ発音塾』1月号, NHK出版, (2009a)
- 斎藤兆史編『NHKテレビ 3ヶ月トピック英会話 (1月～3月期) 話して聞き取る! ネイティブ発音塾』2月号, NHK出版, (2009b)
- 斎藤兆史編『NHKテレビ 3ヶ月トピック英会話 (1月～3月期) 話して聞き取る! ネイティブ発音塾』3月号, NHK出版, (2009c)
- Yuzawa, Nobuo "A critical review of a recent English pronunciation program," *Tohoku Studies in Linguistics*, No.18, pp.45-58, (2009)